

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 第五福竜丸平和協会  
(財) 〒136 東京都江東区 夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

今夏も、広島、長崎を訪れた。私は、毎年、「八月六日」を広島で、「八月九日」を長崎で迎えることにしており、今年には私にとって二十七回目の広島・長崎であった。毎年、新しい発見があるが、この夏特に印象に残ったことの一つは「被爆体験の風化がいよいよ進んでいるな」ということだった。それだけに、いつにも増して「行政も市民も被爆体験の継承に本気で取り組まねばならない時がきている」との思いに駆られた。

## 展示館は体験の風化を防ぐより所

岩 垂 弘

「被爆体験の風化」をとりわけ思い知らされたのは広島である。この街の変容ぶりには毎年、驚かされる。特に九〇年代に入って変容のテンポが加速された。九四年に広島で第一二回アジア大会が予定されていたため、それに備えての建設工事がラッシュとなったからである。ホテルなどの高層ビルが次々と建てられたほか、道路や各種施設も整備され、街のたたずまいは一層現代的になり、美しくなった。それとともに、被爆の象徴・原爆ドームは周りから押し寄せる高層ビル林に埋没してしまった。かつては天空の一

角を切り取るようにそびえていたドームが、目立たなくなつた。そのせいか、今夏のドームは、なんとも元気がないように感じられた。そればかりでない。街が急速に装いを新たにしているにつれて、かけがえのない「被爆の証人」ともいべき被爆建造物が次々と姿を消してしまつたことも、私に被爆体験の風化を実感させた。

人々の原爆への関心も薄らいできていくように思われた。そのことを端的に感じさせたのは、広島市主催の平和記念式への参列者や、原水爆禁止のためのも前年より少なかったことである。このことは、私に「過去の出来事に対する関心も、五〇年をすぎると潮が引くように低くなってゆくものなのか」と思わせた。

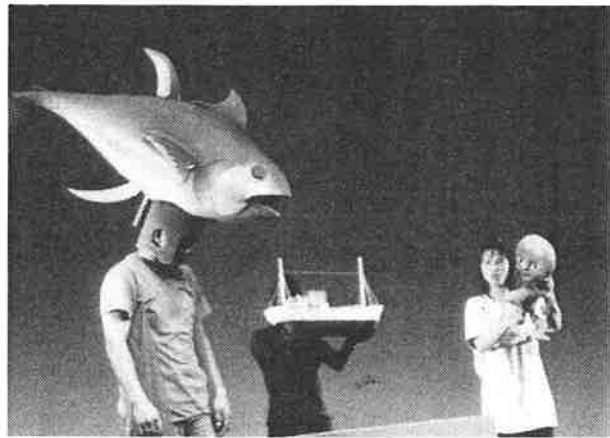
人類の悲願である核兵器廃絶は、なお実現していない。これを現実のものとするためには、多くの人々が核兵器拒否の意思を持ち続け、さらにそれを一層強めてゆく以外に道はない。とすれば、人々に絶えず核兵器の恐ろしさを、悲惨さを思い起こさせるよすがとなる

(ジャーナリスト・平和協会評議員)

## マグロはどこだ？

福 山 啓 子

演劇人は演劇人らしいやり方で反核平和の思いを表したい——二〇以上の劇団・団体とフリー会員で作っている私たち「安保体制打破新劇人会議」はそんな思いで毎年ささやかながら「反核フェスティバル」を開いてきました。



今年八月八日、下北沢の北沢タウンホールで昼夜二回の公演が行われたのですが、三本立ての本が「マグロはどこだ？」——私の書いた作品でした。築地の魚市場に放射能に汚染されたマグロが埋められているというのを聞いたのは二年前前でしょうか。第五福竜丸の事件は知っていても、まさかその時のマグロが魚市場に埋められたとは知らなかった私は「これは使えるゾ」と密かにあたためていたのでした。

今年八月八日、下北沢の北沢タウンホールで昼夜二回の公演が行われたのですが、三本立ての本が「マグロはどこだ？」——私の書いた作品でした。築地の魚市場に放射能に汚染されたマグロが埋められているというのを聞いたのは二年前前前でしょうか。第五福竜丸の事件は知っていても、まさかその時のマグロが魚市場に埋められたとは知らなかった私は「これは使えるゾ」と密かにあたためていたのでした。

人形劇団プークの皆さんの協力を得て上演した「マグロはどこだ？」まずまず好評でした。演じたのは、青年劇場と人形劇団プークの若手三人。二十代の彼等は第五福竜丸の名前も知りませんでした。学校で教わるわけではなく、無理ありません。夏の暑い日、夢の島の展示館や葛西の水

今年八月八日、下北沢の北沢タウンホールで昼夜二回の公演が行われたのですが、三本立ての本が「マグロはどこだ？」——私の書いた作品でした。築地の魚市場に放射能に汚染されたマグロが埋められているというのを聞いたのは二年前前前でしょうか。第五福竜丸の事件は知っていても、まさかその時のマグロが魚市場に埋められたとは知らなかった私は「これは使えるゾ」と密かにあたためていたのでした。

今日皆さんと一緒にマグロ君の話の聞きましよう——というわけ。彼が「オーイ、マグロくん」と呼ぶと、舞台袖から「ナント！実物大のマグロが飛び出してくるという次第。ここですまずお客はドッとわきます。

私にしたところが、今回初めて第五福竜丸以外にも被爆した漁船が沢山いたことを知りました。今なお続いている核実験で、どんな被害が広がっているか、空恐ろしい気がします。「なんでこんなに核実験が必要なの」「知らないって恐ろしいね」「知るとムカツクなあ」云々と話し合いながらの稽古でした。

第五福竜丸展示館のご厚意で貸していただいた資料をもとに作った福竜丸の模型もどんぶらこと現れ、「忘れるな」とつぶやくのです。

三五〇人余の人々に見ていただいた今年の反核フェスティバル。舞台を通じて来年も、その先も、知られていない事実を大勢の人に知ってもらうために、続けていきたいと思っています。「ぼくは忘れない。知らなかったでは済まされぬんだ」というペーチャのセリフのように…… (青年劇場)

当協会の創立来の賛助会員であられた故丸山真男氏のゆかり夫人から、故人の遺志として被爆者援護の運動のために五〇万円のご寄付が当協会によせられました。

### 東西の対話と緊張緩和に貢献

—パグウォッシュ会議の成果と課題(1)—

小川 岩 雄

一九五八年九月、オーストリアで開かれた第三回パグウォッシュ会議は、過去二回の会議の約三倍の規模となり、とくに終了後首都ウィーンで行われた市民集会の熱気は、この会議が今や世界各国の学界に広く支持されることにも、その訴えが多く市民にも届き始めたことを雄弁に物語っていた。

こうして出身国も専門も政治的立場も異なる多数の科学者が一堂に会し、科学の発達をもたらした種々の問題を論じ合うことにより、科学者の責任を広い視野から再確認できる点で、第三回会議のような大型の会議は極めて有効であることが明らかになった。

しかし第二回会議のように、核兵器問題などのとくに差し迫った問題について、専門家を含む少数の参加者で突っ込んだ議論を行ない、各国の政府に対し具体的な提言を行なう小型の会議にも独自の効用があることも確かである。

このような認識の上に、パグウォッシュ会議は今日まで約四十年間にわたり、大小さまざまな会合を二百回以上世界各地で開いてきた。そのうち四十六回が原則として毎年開かれる大型(五年毎)または中型(例年)の年次会議、他は特定の課題に的を絞って随時開かれるシンポジウムやワークショップ(作業部会)などである。

これらの会合に一度でも出席した科学者(いわゆる「パグウォッシュ族」)の総数は約三千人、各個人の出席回数は平均約三十四回だから、全員の総出席回数は延べ約一万回にもなる。なお参加はすべて政府や組織の代表としてではなく、あくまでも個人の資格でとの原則が貫かれてきた。

パグウォッシュ会議発足後の約二十年間は冷戦が最もきびしかった時期であり、核実験競争など米ソの軍備競争が年ごとに激化する一方で、ベルリン危機、キューバ

危機、ソ連軍のプラハ侵攻、ベトナム戦争などの異常事態が引き続いた。東西の外交交渉がたびたび行き詰まり、政府間の非公式な接触の機会も失われる中で、パグウォッシュが用意した非公開で自由な討論や対話の場は、東西間の意志疎通の貴重な媒体となった。

実際、一九六三年の部分的核実験禁止条約(PTBT)を始め、六八年の核兵器不拡散条約(NPT)、七二年の迎撃ミサイル制限条約(ABM)、同年の生物兵器禁止条約(BWC)、さらには数年前(九三年)にまとまった化学兵器禁止条約(CWC)などの締結までには、科学者たちの率直な対話の中で生まれたさまざまな構想や検証方法についての技術的提言、米ソ間の相互理解などが果たした役割が少なくなかった。

例えば一九六二年にロンドンで開かれた第十回パグウォッシュ会議には日本から湯川秀樹、龜淵迪(すすむ)両博士と筆者が参加したが、当時ジュネーブで進められていた核実験禁止条約をめざす交渉は、現地査察の必要性を固執する米国とこれに強く反対するソ連の対立で暗礁に乗り上げていた。この会議でその打開方法を考え

たソ連のタム博士らと米国のイングリズ博士ら六人の物理学者は、封印された無人の自動記録式地震計(いわゆるブラックボックス)を両国内に設置するという解決案を共同で提案し、参加者全員賛同を得てマスコミにも伝え、交渉の促進に大きく貢献した。その晩食卓で同席したタム博士らが「これは名案だよ」と一機嫌で話し合っていたのが印象的だった。

ところでこれらの条約の締結は東西間の信頼の醸成と緊張の緩和に少なからず貢献したものの、軍備競争の激化と核兵器の激増を阻止することは結局できなかった。

その根本原因は、これらの条約の大部分が米ソ(後に英仏中も)の独占的核保有と核抑止政策を相互に認め合った上で、両者の核戦力のバランスや核抑止の安定性などだけを追求する「軍備管理」の域を出ず、核廃絶を目指す真の核軍備や核削減からは程遠いものであったためと言えらるであろう。

パグウォッシュ運動全体がこうした核抑止論の立場を克服して、文字どおり「核兵器のない世界」を現実的目標とするまでには、なお十数年を必要としたのである。(立教大学名誉教授・協会理事)

### 沖縄の海兵隊と情報公開

梅林 宏 道

沖縄の基地問題について、まだ核心に触れる議論が始まっていないように思われる。

沖縄基地の大幅な整理縮小のためには、沖縄にいる米軍の役割についての具体的な議論に踏み込むことが不可欠である。そのためには、とりわけ、在沖米軍の約七割を占める海兵隊の役割と必要性について、国民が考えるための正しい情報が必要とされる。残念ながら、政府も議会も、この点について、ほとんど努力をしていない。

たとえば、沖縄の海兵隊の個々の部隊の過去五年間の行動記録を国民に公表し、必要性の議論に資することが必要である。本場に軍事機密に属する部分を除いてもよい。たとえば参加した演習の細部の公表は難しいであろう。しかし、どこで、だれと、どういう種類の演習をしたかは、現在の米軍の情報公開の許容範囲の中で、情報提供について米軍と交渉可能であろう。この種の一まとまりの情報は、

市民団体が入手努力するよりも、政府や議会の仕事として行う方が容易である。仮に努力の結果、事実情報が入手不可能であれば、そのこと自身が、市民にとって米軍駐留の是非を評価する大切な材料となる。

最近、現役の米海兵隊中佐であるR・K・ドブソン氏が、米海軍協会発行の権威ある月刊誌(『プロシエディングス』六月号)に興味深い小論を発表した。

ブルッキングス研究所のM・モチツキ氏は、沖縄海兵隊不要論を唱えたことは、日本でも紹介されたが、ドブソン氏は、沖縄に二年以上勤務した経験にもとづいてそれに反論したものである。限られた実例を紹介しているだけであるが、一般論でなく具体的な活動を、現場指揮官が明らかにしたのは初めてであり、たいへん貴重である。

ところが、彼がこの論文で自分たちの実績を力説すればするほど、

沖縄海兵隊は、日米安保条約を逸脱して行動していることが明らかにされる。第3海兵師団の一大隊を指揮していた彼が、実は日米安保条約などまったく理解していないことが露呈されている。

ドブソン氏の議論の眼目は、沖縄海兵隊のきわだった価値は「特定の紛争に縛られない汎用的な任務」にある、という点である。

氏は、太平洋地域には、紛争に発展する可能性のある問題地域が二二ヶ所もあると述べる。そして、在韓米陸軍が朝鮮有事に専念しているのに対して、沖縄海兵隊はどの紛争にも急派できる部隊として、即応体制が維持されているという。

「そのことをよく示す例として、一九九五年二月、当時沖縄に配備されていた私の大隊(第7海兵連隊第3大隊)の一部が、第二次国連ソマリア活動要員のソマリアからの水陸両用作戦による撤退を援助した。」と説く。

さらに、多様な任務の一つとして、沖縄の海兵隊は日本、ロシア、タイ、フィリピン、韓国、オーストラリアなどの国々と、毎年七〇以上の共同演習を行っていることを彼は明らかにする。これらの国々

との軍事協力を強化するためである。

いったい、これらの活動は日米安保条約と関係があるのだろうか。在日米軍は、米国の東アジア太平洋戦略を担うために日本にいるわけではない。日米安保条約に則って「日本の安全と極東の平和と安全」(第18条)のために駐留している。

海兵隊が数えている二二ヶ所の紛争可能地域のうち、曲がりなりにも安保条約の守備範囲にあると考えられるのは、北方領土問題、竹島問題、尖閣諸島、朝鮮半島、台中問題の五ヶ所にすぎない。その他の問題に即応体制をとる必要などない。ましてやソマリア作戦を沖縄から展開する必要はない。同じように、日米安保条約の枠内で考えると、タイ、フィリピン、オーストラリアなどとの共同作戦の訓練は、ピンとはずれの行動である。

外交関係は、法律(条約)と事実とに照らしながら検証されること、最低の必要条件である。(太平洋軍備撤廃運動・国際コーディネーター)